

お箸の平衡主義文化論序説

— 中国伝統文化の精髓はどこにあるか —

馬 彪

1 はじめに

人には人格があり、国には国格があり、時代には時代格があるならば、もちろん文化にも文化格があるはずだろう。けれど、「中国文化」とはなにかと聞かれたら、典型的な答えはおそらく「非西欧諸文化の漢字文化」や「儒教文化」ということであるだろう。しかし、「漢字文化」と「儒教文化」とも中国文化の一部、或いは代表的な一部に過ぎず、中国文化の文化格とはいえない。私は、中国文化の最も独特なところはなにかと考えれば、それは西洋文化とは全くちがう平衡主義文化格ではないだろうかと思う。また、その文化格の誕生は、遙か昔から、貴族も庶民も毎日使うお箸に由来するので、筆者はそれを「お箸の平衡主義文化」と名づけたい。

なぜならば、お箸というものは、儒教よりも遙かに古い時代に誕生し、漢字よりも古く、中国文化要素の一部となったかもしれないからである。少なくとも、周知の3300年ほど前の殷墟遺跡で発掘した甲骨文字（亀甲・獣骨に刻まれた文字）とともに、銅製のお箸も発見された。貴族しか使わない文字とは違い、お箸は庶民達でも使っていたことは間違いない。確かに、彼らが日常的に使っていた木製や竹製のお箸は残りにくいので、現在見つかっている最も古い木芯漆のお箸は前2世紀馬王堆1号漢墓の箸であるが（図1）、後漢時代の画像石にもお箸を使う様子がみられる（図2）。

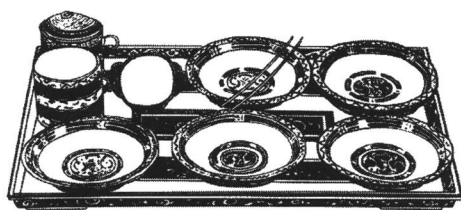


図1 前2C馬王堆1号漢墓の箸それは両端とも細い箸で、(日本にもある)祖先と共に食べる意だろう(孫機『漢代物質文化資料図説』(増訂本)上海古籍出版社2008より)



図2 後漢代武氏祠画像石(AD147):若者は老人にお箸で進食している様子(孫機『漢代物質文化資料図説』(増訂本)上海古籍出版社2008より)

近代以来、中国人が西欧文化を学んできた中で、確実にチャイナドレスよりも洋服、朝食はご飯よりもパンというように、日常生活習慣において大分変っている面もあれば、なかなか変わらない面もある。お箸はその典型的な一例であるだろう。つまり、中国固有のお箸文化を失っていないことは事実である。

漢字の発祥地は中国であって、漢字文化圏は東アジア、または南アジアの一部にまで広がっていた。それならば、お箸を使用する地域も遙か昔から1つのお箸文化圏となっていたといっても、過言ではないだろう。このように、お箸文化とその文化圏が存在していると考えたら、その文化の特徴は何だろうか、またその文化は現代人に何を教え示してくれるのか、本論で答えたい。

2 お箸文化とはなにか

漢字文化とアルファベット文化との間に相異があるように、お箸文化も西洋のフォーク文化と比べてみると相違がある。西洋式のようになにもかもナンバーワンになりたいという考えと違い、すべてのことにおいて二つの分極点(二本の箸)のバランスをとることを強調する文化であるだろう。お箸文化の特徴として、少なくともフォークの使い方と違い、お箸の使用は訓練しなければできないということ、また両手とも使える人は殆どいないこと、という二点が述べられる。二本の箸を互にバランスをとることは簡単ではなく、換言すれば、人間のバランス感覚を養成することは難しい。このような特徴が、私が中国文化とはお箸の平衡主義文化と名付けた所以なのである。

平衡の重要性なら誰でも知っているが、平衡主義とはそれとは別ものであり、意識的に全てのことのバランスを取るように考えることである。例えば、呼吸することは誰でも知っていて、それは無意識の本能的レベルにしかとどまらないが、「気功」なら別概念になるだろう。気功とは意識的に呼吸することであり、長い間練習しなければならない、いわゆる「功夫」(カンフー)という身・心一体の技である。平衡主義とは、「カンフー」より複雑な数千年以上熟成しないとできないもの、まさに1つの文化、あるいは精神ともいえよう。それを古の孔子の言葉に替えて言うと、「中正」という抽象的な概念になるのである。

古典には以下の物語がある。ある日孔子は生徒達をつれて、自国の魯桓公の祖廟に見学をしに行った。そこで一つの傾いている妙な盛水器をみつけた。孔子は、

これが「宥坐(ゆうざ)の器(き)」(宥は右と同じ、人君、座右に置いて以て戒とすべきもの)とよばれ、水を入れなければ常に傾いていて、「虚(むな)しければ則(すなわ)ち欹(かたむ)き」(図 3a)という。水をちょうどこの器の半分の中ほどまで注げば、器はまっすぐ立てるようになり、「中(ちゅう)なれば則(すなわ)ち正しく」(図 3b)という。しかし、それ以上水を入れれば、器が転覆し、「満(み)つれば則(すなわ)ち覆(くつがえ)る」(図 3c)と説明した。その際、孔子の弟子が水を注ぎ実験したら、まさにいうとおりだった。¹

¹ 『荀子』宥坐篇に「孔子曰く、『吾聞く、宥坐の器なる者は、虚しければ則ち欹き、中なれば則ち正しく、満つれば則ち覆ると。』孔子顧みて弟子に謂う曰く『水を注げ』と。弟子、水を掲げて之に注ぐ、中にして正しく、満ちて覆り、虚しくして欹く。孔子、喟然として嘆じて曰く、『吁、悪んぞ満ちて覆らざる者あらんや』と。子路曰く『敢えて問う、満を持するに道ありや』と。孔子曰く『聡明聖知なるも之を守るに愚を以てし、功、天下に被るも之を守るに讓を以てし、勇力、世を撫ふもこれを守るに怯を以てし、富、四海を有つも之を守るに謙を以てす。此れ所謂挹りて之を損するの道なり』と」とある。

孔子の教えについて生徒達が学んだことは様々あるかもしれない。魯の国王の桓公は生前に「宥坐の器」を常に自分の右の前に置き、「中正」という訓戒をうけた。このやり方は、そのあとに「座右の銘」へと変わったが、「中正」という道が中国歴代の君主に継承されたことは違いない。ラスト・エンペラー時代の清朝の皇帝はわざわざ「宥坐の器」（欵器ともいい、傾側せる器の意（図4）。）を復元したこともあった。王朝時代は百年にも前に終わったが、その「宥坐の器」は北京の故宮博物館に陳列されている。

図3 孔子の「宥坐の器」についての説明のイメージ図

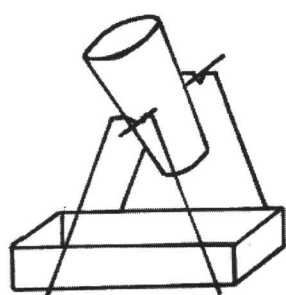


図3a 虚しければ則ち欵き
むな すなわ かたむ

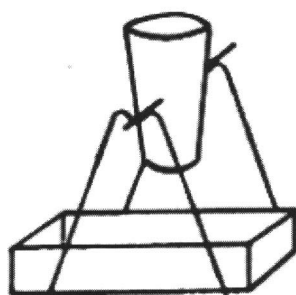


図3b 中なれば則ち正しく
ちゆう すなわ

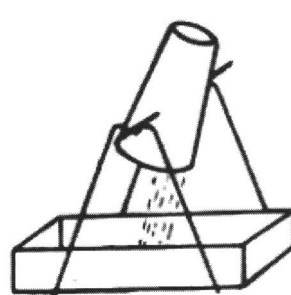


図3c 満つれば則ち覆る
み すなわ くつがえ

孔子は宥坐の器によって、学生に「中なればすなわち正しく」なる「中正」ということを教えた。このような思想は、古来の中国民衆達の日常生活においてとても身近であるお箸の使い方にも、自然に浸透してきた一種の文化といってもよいだろう。生活意識だけではなく、ものも人間も、その構造的なバランスを大切にすることは1つの伝統文化となった。これから紹介するように、中国伝統文化のなかにおける漢字から宇宙論まで、中華料理から漢方薬まで、西洋式のなにもかもナンバーワンという考え方とは違い、中国においてはなにもかもがバランス第一といえるであろう。

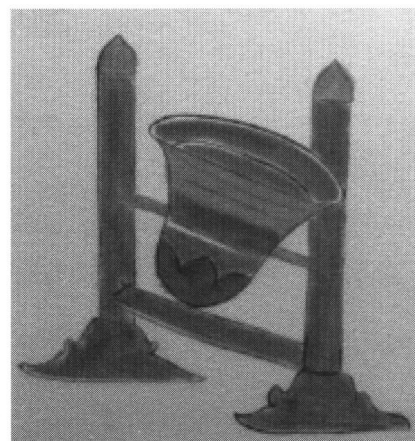


図4 トルファン博物館所蔵7世紀 Astana 古墳の
壁画に絵がれた「宥坐の器」(欵器)

3 物・物関係にみる平衡主義文化

アルファベットと違い、漢字は必ず二部の構造がある。例えば「字」は「宀」と「子」の上下構造、「明」は「日」と「月」の左右構造があり、その文字構造のバランスをとることは大切で、もしその構造を崩せば書道に合わないということのみならず、「日」を「曰」と間違えることもある。

神が宇宙を造る西洋説と違い、中国の宇宙図には、太極原点から陰と陽という互いに対立する属性を持った二つの気が生まれ、万象万物の生成消滅という変化はこの二気によって起こり、その順によ

ってモノとヒトが生じると描かれている（図5）。つまり、陰陽両界のバランスがうまくとれれば万物は順調、そのバランスが崩れれば不調と考えるのである。このような宇宙生成論をお箸にたとえると、太極原点は二本箸の間には必ず交差点であり、陰陽両界は二本の箸であり、万象万物はまさに二本のお箸で対応されるすべての料理であろう。宇宙論とはちがい、お箸の平衡主義は庶民もつねに体験している。

大自然界において、天（陽気）と地（陰気）のバランスがとれれば、凡ての生態系（無機・有機・植動物）が生存できるという古代原理は、意外にも今日の科学的な自然界のエネルギー代謝のバランス原理には合っている。

太陽光（＝陽）のエネルギーは地表（＝陰）の植物に至り、光合成によって生成される有機物の化学エネルギーが草食動物や微生物を育成する。動物が代謝や運動をしながら呼吸を行うことによって、そのエネルギーが熱となり、赤外線として宇宙空間（＝陽）に放出される。したがって生態系（＝万事万物）においてはエネルギーの（＝陰陽二界の）出入りのバランスをとる原理がある。

古来の暦法というカレンダーには、太陽系によって計算する二十四季節もあれば、月による潮汐にしたがう朔日（一日）や望日（十五の日）もある。いわゆる陰陽暦である。

数をかぞえると、必ず天を表す10数字と地を表す12数字、いわゆる「十天干」と「十二地支」を組み合わせた60を周期とする独特の記数法がある。暦を始めとして、時間、方位などに用いられる。

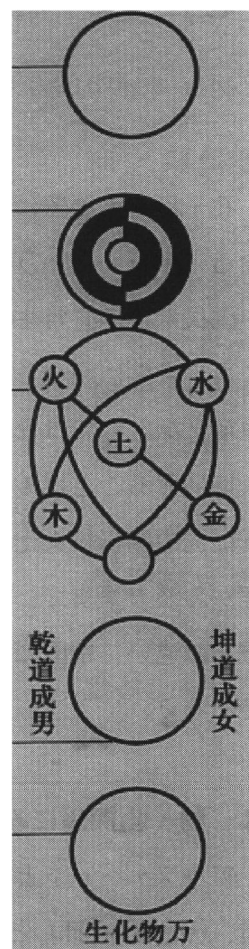


図5 宇宙構造図

数学はどんな民族にも最も古い学問の1つであり、中国伝統数学においては〇～九の十進法を使う一方で、同時にすべての数を陰数と陽数に分けて使っていた。いわゆる「一正一負、陰陽之象也」である(図6ab)。陰数と陽数という数学概念は、他の民族の負・正数と同じように見られるが、実際には上述のように、中国の陰と陽という概念は、数学のみならず哲学的なものである。ゆえに、17世紀ドイツの哲学者・数学家のゴットフリート・ライプニッツ氏は、いにしへの中国人はなぜ「-」陰爻(こう)と「-」の陽爻という2つの符号によって万事万物を計算することができたのかということに興味を持ち、1と0を使って二進法を表明した。その二進法が今日普及しているパソコンの基本原理となったのは周知のことであるが、いにしえから中国人はその二進法と十進法との二つの原理を同時に使っていたということが、数学分野のバランス主義現象ともいえよう。

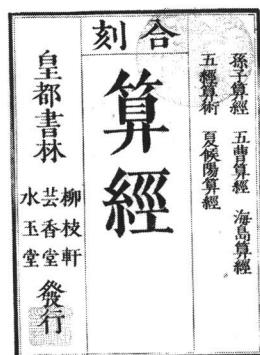


図 6a 和算家の村井漸(江戸)印刷した中国の「算経」と彼の序言

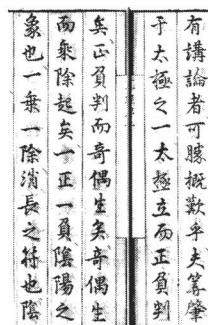


図 6b 「夫算肇于太極之一、太極立而正負判矣。正負判而奇偶生矣。奇偶生而乘除起矣。一正一負、陰陽之象也。一乘一除消長之符也」と。

中華料理屋さんは日本のいたるところに存在する。中華料理は数多くの流派(四川料理・粵料理・山東料理・淮南料理など)にわかれているが、共通的な基本の特徴もある。それは西洋料理の高脂肪、高蛋白質、高カロリーという特徴とはちがひ、中華料理は肉類と野菜類の均衡を大切にしているということである。たしかに、アブラを使っても殆どが植物油であり、一見油っぽい料理だがお茶とセットで食べる習慣があるので、特に肥満のもとになるとはいえないだろう。

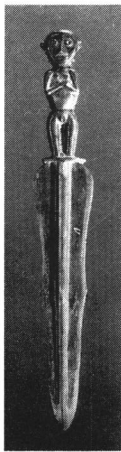


図 7b 女性器
みえる陰劍



図 7a 男性器
みえる陽劍

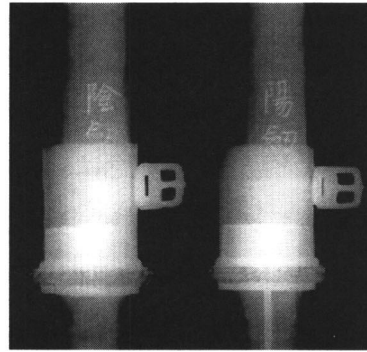


図 8 2010年に奈良東大寺大仏殿内で保存している国宝2本の金銀荘大刀「陽劍」「陰劍」だとわかり、これは同寺と元興寺文化財研究所が2010年10月25日発表したX線写真。

(<http://www.asahi.com/culture/update/1025/OSK201010250116.html> ネット版朝日新聞記事より)。

日常用品でいうと、いにしえの中国人は、自分の周りで使っているものはよく陰と陽とのペアでそなえる。たとえば、成年男子なら身に携帯する劍は、よく陰劍・陽劍とも用意することが出土品によってわかった(図7ab)。日本でも陰劍と陽劍とのペア劍を発見された(図8)。

今日の南京錠というパドロックは、いにしえには刺す方の鍵は「牡」、刺される方の鍵は「牝」と呼んだ。やはり、陰と陽、牡と牝というペア概念は日常の生活に溢れていたようである。

人間は生きるときだけではなく、死んだときにもお墓にも陰と陽とをはっきりあらわすモノを置かなければいけないことになっている。例えば、2000年前の前漢馬王堆漢墓から出土したお棺を覆う幡には右に太陽(日)、左に太陰(月)が描かれていた(図9ab)。



図 9b ヒキガエルある太陰(黄石林・朱乃誠著、高木智見『中国考古の重要発見』日本エディタースクール出版部 2003より)



図 9a カラスある太陽(黄石林・朱乃誠著、高木智見『中国考古の重要発見』日本エディタースクール出版部 2003より)

上述のすべてのモノのように、二本の箸のように二分化できる思惟は、当然ながら中国人の抽象的な精神面にも浸透している。典型的な例で「塞翁が馬」をあげてみると、前漢の『淮南子』人間訓に昔、塞翁の馬が隣国に逃げてしまったが、名馬を連れて帰ってきた。老人の子がその馬に乗っていて落馬し足を折ったが、おかげで隣国との戦乱の際に兵役をまぬがれて無事であったという話である。

そこから庶民たちにまで知られる「塞翁失馬」という四字熟語が生じ、「人間万事塞翁が馬」の意で、人間の幸（福、吉）と不幸（禍、凶）は常にペアであり、福と禍は、一定の条件の下で、互いに転化することをたとえる²。したがって、いにしえから中国人の考えでは、福も禍も、善いも悪いも、強いも弱いも永遠なものではなく、中軸を持つペア的な存在の両端は、互いに転化することのみによって永遠となるのである。人間のできることは、対立している両端のあいだにいかなるバランスを維持するかということである。

4 人と物とのバランスをとる文化

人間と物との関係でいうと、いにしえから人間はまわりの自然資源をどのようにうまく利用するかという問題がある。戦いによって自然を征服する西洋思惟と違い、中国人にとっては「人、必ず天に勝つ」（荀子）という考えを克服し、人と自然の調和的にバランス関係を強調する「天人合一」の命題が主流となる。

天と人間との関係をどうとらえるかという問題は、中国伝統文化を貫く大きなテーマであるが、天人を対立するものとせず、本来それは一体のものであると考えることを「天人合一」と呼んでいる。人間は「天」や自然環境とは理を媒介にして1つながりであるというのが、伝統的な中国の考え方である。

2千年前の漢代の儒学者・董仲舒は、人には天が投影していると考えた。彼の主張した天人相関説は、森羅万象と人の営みには密接な関係があると説き、1年の月数は人体の12節に、五行は五臓に、昼夜は覚醒と睡眠に対応すると論じた。天文で人の運命を読むのも即ち天人が相関関係にあるがゆえであり、帰する所、人体は全宇宙の縮図にして小宇宙であると説いた。天子が行う政治も天と不可分のものであり、官制や賞罰も天に則って行うべきであるという。³

今日の環境汚染問題と違い、中国伝統文化は自然を育成してその中に安んじ得るものが真の文化

² (漢)『淮南子』人間訓に「昔、中国北方の塞（とりで）近くに住む古い巧みな老人（塞翁）の馬が、胡の地方に逃げ、人々が気の毒がると、老人は「そのうちに福が来る」と言った。やがて、その馬は胡の駿馬を連れて戻ってきた。人々が祝うと、今度は「これは不幸の元になるだろう」と言った。すると胡の馬に乗った老人の息子は、落馬して足の骨を折ってしまった。人々がそれを見舞うと、老人は「これが幸福の基になるだろう」と言った。一年後、胡軍が攻め込んできて戦争となり若者たちはほとんどが戦死した。しかし足を折った老人の息子は、兵役を免れたため、戦死しなくて済んだという故事に基づく」とある。

³ (漢)董仲舒『春秋繁露』に「求天數之微，莫若於人。從之身有四肢，每肢有三節，三四十二，十二節相持而形體立矣。天有四時，每一時有三月，三四十二，十二月相受而歲數終矣。官有四選，每一選有三人，三四十二，十二臣相參而事治行矣。以此見天之數，人之形，官之製，相參相得也。人之與天，多此類者，而皆微忽，不可不察也。天地之理，分一歲之變為以四時，四時亦天之四選已」とある。

生活であると主張する。

人間と自然界との関係で、1つの簡単な例をあげてみる。筆者の統計によると、中国人の苗字で直接に植物を指す苗字は、直接に動物を指すその倍ほどある。例えば、ほぼ千年前に出来た『百家姓』という当時の代表的な504の姓を載せている本には、李・楊・秦・華・柏・米などのような植物、とくに穀物を指す苗字は39あり、馬・牛・羊・熊など動物、とくに家畜を指す苗字は18ある。⁴

苗字だけであるが、やはり農業文明の中国では、人がとくに農産物や家畜に親しくなっているという、自然環境に対する認識が現われている。それならば、中国人の伝統的な自然観にもバランス主義がみられるだろうか。

中国人の自然に対する観念がよくあらわれる「薬」を具体例としたい。「薬」という字は約2000年前に書かれた字書の『説文解字』に「病を治す艸（草）なり」と解釈されている。漢方というクスリは基本的に薬草である。実は、中国だけではなくすべての古い民族はみな薬草に頼り病気を治療する時代が長かったはずである。古代メソポタミア・エジプト・ギリシャ・ローマ・イスラームなどみなそう。しかし、中国においてはいにしえから薬草での治療がはやくから1つの専門分野となった。それが「本草学」と呼ばれた学問である。

「本草」という用語は、遅くとも紀元82年ごろ成立した『漢書』にも見られた、薬草学という意である。前2世紀に成立した『淮南子』修務訓に

「古代の人は、(手当たり次第に)野草、水、木の実ドブガイ・タニシなど貝類を摂ったので、時に病気になったり毒に当たったりと多く苦しめられた。このため神農は、民衆に五穀を栽培することや適切な土地を判断すること(農耕)、あらゆる植物を吟味して民衆に食用と毒草(薬草の意)の違い(医療)を教えた。このとき多くの植物をたべたので神農は1日に70回も中毒になった」とある。

また、紀元3世紀の皇甫謐『帝王世紀』に「炎帝神農氏は、草木を嘗味し、薬を宣して疾を療やし、夭傷や人命を救う」とある。

したがって中国人は遥かの昔から植物を健康によいものとわるいものに二分化し、よいものを「五穀」として「食用」のため農耕を発展させ、わるいものを「毒草」として誤食せず、病を治すために利用し、医療を推進させた。

漢方によって病を治すことは先祖代々やってきた経験であり、「化学薬よりまず漢方」という認識は今日にも根深く中国人のあたまに残っている。なぜそう信じているのかという最も大きな理由は、漢方治療の論理自体にある。その論理は、自然界のすべてのものはみなプラスとマイナスがあり、人

⁴ 『百家姓』は、伝統的な中国の教育過程において子供に漢字を教えるための学習書のひとつ。著者は不明だが、宋初の間人であろうと考えられる。中国の代表的な姓を羅列してあるだけの内容だが『三字経』『千字文』と同様に韻文の形式で書かれている。『百家姓』と呼ばれているが、現在の通行本は単姓444・複姓60の合計504の姓を載せている。4字を1句として偶数句末で韻を踏んでいる。なかに植物を指す姓は李、楮、楊、秦、華、柏、蘇、葛、范、苗、花、柳、薛、穆、蕭、米、茅、杜、藍、麻、梅、林、蔡、柯、荀、芮、松、蓬、葉、蒲、蘭、桑、桂、艾、蔚、荊、竺、楚、穀梁などの39があり、動物を指す姓は馬、鳳、鮑、禹、貝、熊、駱、羊、烏、龍、翟、牛、燕、魚、夔、公羊、羊舌、巫馬など18がある。

間の一と十に対して植物の十と一の両面をうまく利用して、治療と救命を果たすことである。

また、漢方の治療理念も西洋医学とは違い、つねに「扶正」と「去邪」という両面の治療方針があり、いわゆる「扶正去邪」（ふせいきょじゃ）方法である。東洋医学では体の抵抗力が弱った場合、暑、寒、湿、燥、火、風という気候変化の要素（六気）によって6つの病気（六淫）になると考えられていた。ゆえに、病気には「扶正去邪」という考え方で対応した。つまり、六気は自然にあるものだからなくすことはできないので、体内に本来ある力（正）を強めて邪の要素を外に追い出すというのである。要するにバランスで物事を考えているのである。それだけではなく、薬療より食療、治療薬より栄養薬、手術より薬草だなどといったさまざまな手法があるが、一言でいうと、人間の体を気のバランスのよい状態に戻し、元気に回復することを目指しているのである。

それになにより、人間はうまく自然環境を守りつつ、利用してきた。草の一部に人工栽培を加え、穀物とし、一部に炮制を加え薬とするが、自然環境を破壊することはなく、人間は自分の周りの自然とは、近代化するまでずっと調和的なバランス関係をもってきた。

5 人間同士のバランス主義関係

西洋文化が激烈的な個人主義を強調するのとはちがひ、中国人は「中庸」という調和的な人間関係を重視する。それは孔子の提出した独特な「中庸」という概念である。「中庸」とは人と人との間の調和的な関係を重視すること、いわゆるどちらにも片寄らない中ほどのことである。不偏不倚で過不及のないこと。中正の道。つまり、バランスをとることはなにより大切なことだと強調する思想である。

その意はまた三つにわけられるはずである。第一意は、「中」は片寄らず、「庸」は易（かわ）らざる意である。人間は極端にならず、自分の目標や主張は変わらず。これが成功する正しい道であるという。第二意は、「中正」「平和」の意である。人はつねに「中正」「平和」の心を持ち、それらをうしなったら喜・怒・哀・楽のバランスが崩れ、人の健康に悪い。第三意は、「中」は好しいの意であり、「庸」は「用」と同じである、即ち用にあたる意で、役に立つという意味である。

一説には、中国人の「中庸」思想は、ギリシアのアリストテレスの徳論の中心概念と似ているという。それは、過大と過小との両極の正しい中間を知見によって定めることで、その結果、徳として卓越する。例えば、勇氣は怯懦と粗暴との中間であり、かつ質的に異なった徳の次元に達する。⁵

中庸思想によつての「不卑不亢」（卑屈でもなく傲慢でもない）という対人態度は、いにしえから最も適当な人間関係をとれるマナーだと考えられてきた。なぜなら、そのような対人意識があれば、個人と共同体との統一や国と国との外交関係もスムーズに果たせるからである。

中庸思想に基づけば、国家、とくに漢帝国における儒教国家の人間管理でも、皇帝の君主専制を実

⁵ 『論語』雍也に「中庸之为徳也、其至矣乎」とある。何晏の集解に「庸、常也、中和可常行之道」と。子思『中庸』に「子程子曰、不偏之谓中、不易之谓庸。中者、天下之正道。庸者、天下之定理」とある。北齊時代の顔之推『顔氏家訓』教子に「上智不教而成、下愚雖教無益、中庸之人、不教不知也」と。清代の俞樾『茶香室續鈔』三階に「言人有三等、賢・愚・中庸」とある。

行すると同時に、官僚の選挙制を行っている。法律国家機能を厳密に備える（近年、出土した秦漢時代の木簡・竹簡の過半数は当時の法律文書）一方で、「孝」を中心としての倫理教育の推奨に力を尽くす。いわゆる朝廷の「内法（法律）-外儒（倫理）」政策である。

国家の運営について、歴代の中で難しい問題の1つは、皇帝の君主権と家族長の宗族権とのギャップである。それは、いわゆる「君統-宗統」の間にいかなるバランスをとるかということである。現代語に換言すれば、民主と君主と統一するかどうかの難問題である。

ヨーロッパの小さい各邦国とはちがい、中華帝国はつねに莫大な領土を持ち、巨大な国家機構を運営しなければならない。したがって、知識人はいにしえから官僚との協力を求められてきた。古代ギリシアの哲人は官僚になりたくないと考えていたが、中国では知識人と官僚の性格を併せ持つ士大夫が2000年前にも政治舞台に登場した。このことはまさに知識と行政管理とのバランスをとった所産である。士大夫という概念でさえ西洋には存在しなかったため、どのようにその言葉を西文に訳すかの問題は、近世において中国を訪ねた欧州宣教師の頭を非常に悩ませたのだろう。結局は scholar-bureaucrat や scholar-officials とのような合成語にしか訳すことができなかった。

国際関係にも中庸思想は通用する。西洋の「国家利益主義」と違い利益より正義を重視することは、国際外交においては原則である。つまり、外交信用を失くないためには、利益のための武力や経済力の侵入はみとめられないのである。

戦争において、西洋人はまた勝利者が英雄と考える（スーパーマンとは英雄を象徴する）が、中国では「先礼後兵」や兵器=凶器や「武帝」という諡号は、マイナスの意味もある。戦争はみな人間関係を崩すこととしてみとめられないのである。

スポーツでいうと、古代からギリシャの五輪精神は「より強い、より高い、より速い」というよく耳にしているスローガンがあるが、いにしえから中国人のスポーツ観はそれとはちがい、むしろ「よりバランスをとる」ことであった。つまり動と静、身と心（わざ）の平衡性を大切にし、激しくせずとも健康維持や生命力をアップすることを目標とする。例えば、武術家出身の俳優のブルース・リーやジャッキー・チェンのカンフー・アクション映画の世界で、有名になった中国武術（カンフーともいう）の基本原則は勝負より武徳だ。武徳とは武術家として守るべき徳義である。

6 文化と文明とのバランス関係

最後に、避けられない問題の1つであるが、お箸文化の「文化」の「文明」との相異点はどこにあるか、文化と文明との関係とはなにかと述べたい。極単純に言えば、箸の発明やその使用は文明であるとはいえ、箸からすべてのことに二分化する思惟とそこから生じた観念的なものは文化のカテゴリーに属する。文明は文化の土台であり、文化は文明より一層発達したものである。

文明とは、世の中が開けて生活が物質的にも精神的にも豊かになること。特に、物質面における生活の発展すること。いわゆる急に成長できる人間の技術的・物質的所産である。

文化とは、人間が理想の現実のために果たしてきた精神的な活動とその所産の総称。すなわち、

千年以上熟成させなければ簡単にはできない宗教・道徳・学芸などの精神的所産である。

要するに、「文化」と「文明」との2つの概念は、別々に使うときには意味をはっきり区別しない場合がある。例えば「中国文明」と同じ意で「中国文化」とも言う。しかし、「文化」と「文明」を一緒に使うとき、「文明」は生産様式や生活の豊かさを指し、「文化」は殆ど精神の面について使う。つまり、文化は言語符号や思想や芸術や生活習慣や伝統などであり、文化の精髓は民族として特別な教育に類したものをもっていることもある。それはなにものにもかえがたい修練を積むことであり、一朝一夕に出来あがるものではない。

中国文化といっても、そのなかはまた伝統文化と現代文化にわけられ、これから述べたいのはただ中国の伝統文化のみである。しかし、伝統文化を述べたい理由は現代文化にもあり、それは20世紀60～70年代の間に中国に発生した「文化大革命」にもかかわる。簡単に言えば、その「文化大革命」は失敗してから、80年代に中国は「文化熱」というあらゆる文化に興味をもつブームを迎えた。そのブームのあとに、90年代の中国人は西洋・東洋、伝統・現代のすべての文化に反省をした。そうして今日、伝統的な東洋文化と現代的な西洋文明とあわせ、21世紀中国文化の再生を目指す結果となった。

つまり、物質的な文明と精神的な文化とのバランスを取れるかどうかという、時代的な課題に直面しているのではないかと筆者は考えている。ただ、そのような時代的な大きい課題にうまく答える前に、なにより重要なことは、中国伝統文化というのはいかに一体に何であるかを答えるべきだろう。参考として、これまでで最も有力とされている西洋人の歴史学泰斗のトインビー氏と、東洋人の歴史学泰斗の内藤湖南氏の説を紹介しておきたい。なぜなら、二氏とも世界史のなかにおける中国の歴史、とくに文明史と文化史の位置を把握した偉大な結果を残したからである。

トインビー氏はイギリスの歴史家であり、氏の『歴史の研究』という名著において、6千年の人類史上26～30の文明形態の中で、中国文明だけが途絶えないものだと主張した。

内藤湖南氏の『支那上古史』には、中国文化の発展は一本のまともな木と譬えられ、日本・欧州とは違う「中国史こそ典型的だ」、史上唯一の一文化の自然発達の系統であると結論づけた。⁶

では、このように人類文明史にも唯一の途絶えなく、自然に発達してきた中国伝統文化が形成されたわけと、その特徴は何かということを追求するため、本論ではお箸のバランス文化という文化格を中心として述べた。

⁶ 『支那上古史』緒言(『内藤湖南全集』第十巻収録)に「支那(中国)文化発展の全体を通観すれば、宛も一本の木が根より幹を生じ葉に及ぶが如く、眞に一文化の自然発達の系統を形成し、一の世界史の如きものを構成する。日本人も歐洲人も、各々自国の歴史を標準とする故、支那史の発展を變則と見るが、それは却って誤って居り、支那文化の発展は、文化が眞に順當に最も自然に発展したものであつて、他の文化によって刺激され、他の文化に動かされて発達して来たものとは異つてゐる」とある。

【参考文献】

- 1 太田昌子『箸の源流を探る 中国古代における箸使用習俗の成立』 汲古書院、2001年。
- 2 ルネ・ブーヴレス『ライブニッツ』 橋本由美子訳、白水社、1996年。
- 3 山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』上・下 思文閣出版、1995年。
- 4 内藤湖南『支那上古史』『内藤湖南全集』第十卷、筑摩書房、1969年。